

Ocuac News

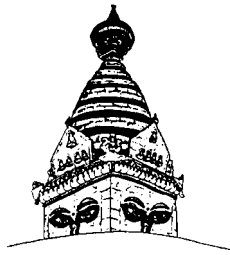
市大山岳会ニュース No.26 1999.2.15

ネパールでの100日。

藤本勇

私達夫婦は昨年8月初旬より100日余りネパールの山旅を楽しんできました。

8月はモンスーンのなか、高地にしか咲かない「青いケシ」を見つけ感激しました。9月から10月にかけて、大阪山の会の西北ネパール登山隊に参加し、いまだかつて外国人の足跡のない西北ネパールを歩いてきました。その行動中、NHKの取材班が同行し、シェルパを中心にビデオを撮りました。11月は世界の屋根の展望台ゴークョから真近にエベレストを眺めることができました。以下に報告いたします。



8月5日、私達は関空を飛び立ち、ネパールの首都カトマンズに着いた。最初はエベレスト方面に入山すべく計画を立てていたが、モンスーンの影響で連日フライトがキャンセルされ、仕方なくポカラに飛び、ジョムソンへのフライトで馴染みのロッジに着いたのが8月10日だった。ここからガイド1名とポーター2名でカリガンダキ河を下ることとする。マルファからダウラギリ1峰のベースキャンプへの道をたどる。覚悟はしていたが、ネパールの8月は雨季で連日、雨、霧、雨の日が続き山の姿は何も見えない。しかし、高山植物が咲き乱れ、高地(4,300m以上)でしか咲かない「青いケシ」がガレ場で可憐に寂しげに咲いている姿に接した時は感激し、年甲斐もなく頬づりしたくなるようだった。花は径が5cmぐらいで、花弁は薄い青色、蕊は黄色であった。9月から始まる山旅に備えて4,100mの高地で3泊する。ベースキャンプまでの道のりは遠く、高度4,600mぐらいで引き返す。

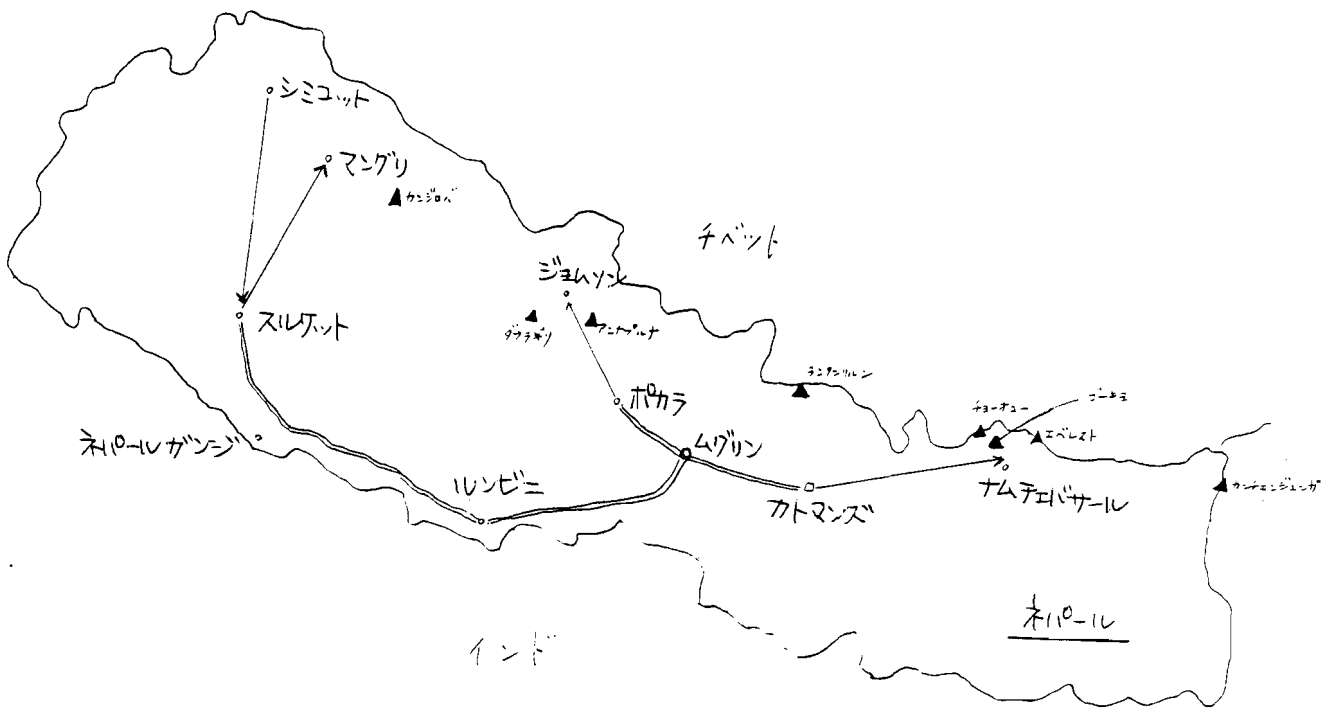
ツクチェでは、明治時代に単身チベットに潜入した僧侶、河口慧海が暫く逗留した家が、そのまま残っていた。タトバニまで、広い河原や増水した急流のカリ

ガンダキの河岸を下る。タトバニは有名な温泉地。あまりの良さに1日ステイする。風呂好きの女房は一日5回も入浴した。露天風呂の直ぐ横をカリガンダキが怒り狂ったように流れていく。

タトバニからは石楠花で有名なゴラバニ峠を登る。道中のロッジでは絶えずノミや南京虫の襲撃にあい、峠では蛭の落下に出会う。霧の中、飛行機の爆音が聞こえる。こんな天気によく飛ぶなあと思っていると、ネパール放送で一機行方不明とのこと。この飛行機は、私達がジョムソンに飛んだときの定期フライトであった。機体は発見されたが全員死亡だそうだ。

ポカラに近づくにつれ、炎天下の中を歩く。ポカラからカトマンズまではバスに乗り、カトマンズに帰着したのが8月23日であった。

大阪山の会(大阪府岳連)の登山隊が8月末に着くまでの間、体調を整えるために日本料理店に通いづめた。これから入山する札幌のダウラギリ隊、マナスルの北西壁を目指す山野井・長尾夫妻、サイバルへ向かう野沢井君達らと食事を共にしたりして、カトマンズの休日を楽しむ。



いよいよ9月2日に陸路でスルケットに旅立つ。途中パイラワ（現在シッダルタナガル）で一泊し、釈迦の生誕地であるルンビニに立ち寄る。聖地では日本の仏教会が修復工事をしていた。スルケットは現国王の名前をとりピレンドラナガルという別名がついている。街は結構にぎやかで、バザールにも品物が沢山あった。我々の行き先の西北ネパールは辺境の地で、アンナプルナ、ランタン、エベレスト街道のようなロッジやパティ（茶店）などはほとんどなく、食糧・燃料などほとんどをカトマンズから用意せねばならない。隊荷は総重量4トンあまりにも及ぶ荷物であった。ネパールで作られたコシヒカリ（藤田米）180kg、ポーター用ネパール米だけで600kg、日本から持参した半生うどん60kgなどである。

9月5日、大型ヘリを2回飛ばし、隊員と隊荷を空輸するも、ポーター用ネパール米を少し積み残すこととなる。ヘリが下りたところはムグ・カルナリ河、ララ湖東のガムガディ上流のマングリと言う部落。前触れもなく突然収穫前の稗畑に下りたので、村の人達がおどろき、学校の校庭に設営したテントを囲んで中を覗き込んでくる。一日荷物の整理に費やして、7日よりポーター123名を従えての大キャラバンに入った。

9日の朝、チャンゴコーラの出会いで登山隊と別れ、我々は最奥のムグの部落へ。キャラバンを始めたマングリからムグまでの河沿いには部落は少ない。ムグは民家100軒余りで、この辺にしては大きな村であった。今年から村の裏に落ちる支流の水を利用して小型の発電機が設置されて、夜間電灯が灯るようになった。チェックポストに立ち寄って過去のトレッカーの記録を見ると、昨春の大阪山の会以外には僅かに数名しか記入されていない。

ムグより半日登った所のプラノムグ(3650m)にベースキャンプを設営する。ここに約3週間滞在した。私達

の任務は、ナムジャ・ラ峠の周辺から西のタンケコーラのネブカへ下る道の有無の調査、ムグコーラ周辺の谷の探索、後半の山旅に備えて全員の高度順応である。ここからナムジャ・ラ（峠）(4986m)への道はチベットとの交易路で、我々が滞在している間、ヤクや馬の背に荷物を積ませて交易の旅をするチベットやネパールの人達が盛んに往き来する。何百頭もの山羊の群を見ていると人里離れた所とはとても思えなかった。

探索したのは、コジコーラ、コジチャウルコーラ、タンキャコーラなどである。コジコーラは、昨年春に大阪山の会が入り無名峰を2座登頂している。コジチャウルとタンキャの谷は、まだ記録がないので、外国人としては我々が始めてではないだろうか。吉永総隊長は9月末には帰国しなければならず、タンキャコーラの取り付けから中流部を探索されただけで下山された。本人が行きたかったネブカへの道は、後日我々を通ることになった。

ベースキャンプに滞在中、モンスーンの明ける頃、北から南の空を飛来する「あねは鶴」が逆V字型の編隊を組んで飛んでいくのを見た。その昔P29の遠征の時、日本人として初めてツルの飛来するのを撮影した住吉ドクターは感激されていた。またドクターは、ムグの人達が治療や薬を求めてベースキャンプを訪れるので、対応が大変であった。

10月1日に登山隊の一行が我々のベースキャンプに到着し、またNHKの取材班もポーターを従えて到着する。女性隊員の作った久しぶりの日本食を食べ深夜まで歓談が続く。登山隊は、雪が付着した500m位の逆層の岩壁にはばまれて登攀を断念せざるを得なかったとのこと。先ずは全員の無事を祝う。

NHKの取材班は、ヒマラヤ登山にとってシェルバの働きがどんなものなのか。彼らは何故危険な仕事を

やるのか。シエルバ気質とは何かを中心にして取材する。

ここブラノムグから次の部落ネプカまでの無人地帯は、二つの隊に分かれて行動することとなる。A隊は、事前に探索したタンキャコーラからタンケコーラに向かう。B隊は、ナムジャ・ラ（峠）から国境稜線に沿って、カング・ラ（峠）(5395)を経てタンケコーラに入り、A隊と合流する。私はA隊、女房はB隊になった。

10月4日、いよいよ後半の登山活動が始まる。お互い元気な姿での再会を約し、長期滞在したブラノムグに別れを告げる。タンキャコーラの源流を目指して道無き所を登る。谷の取り付きはゴルジュで、左岸を急登する。過去の踏跡が少し残っていた。森林限界を過ぎた辺りからはU字谷になり、明るい谷であった。踏跡もヤクの糞もなく、人気のない静かな谷を遡る。2日目には源流の最低鞍部に達し、そこには小さなチョルテンが寂しく立っていた。外国人として初めてのトレースだったが、現在は地元の人達にも忘れられた古い峠である。過去には、二つの谷を結ぶ交流が僅かながらあったのであろう。峠(5049m)には少し新雪が積もっていた。タンケコーラへの下りも一面雪化粧。

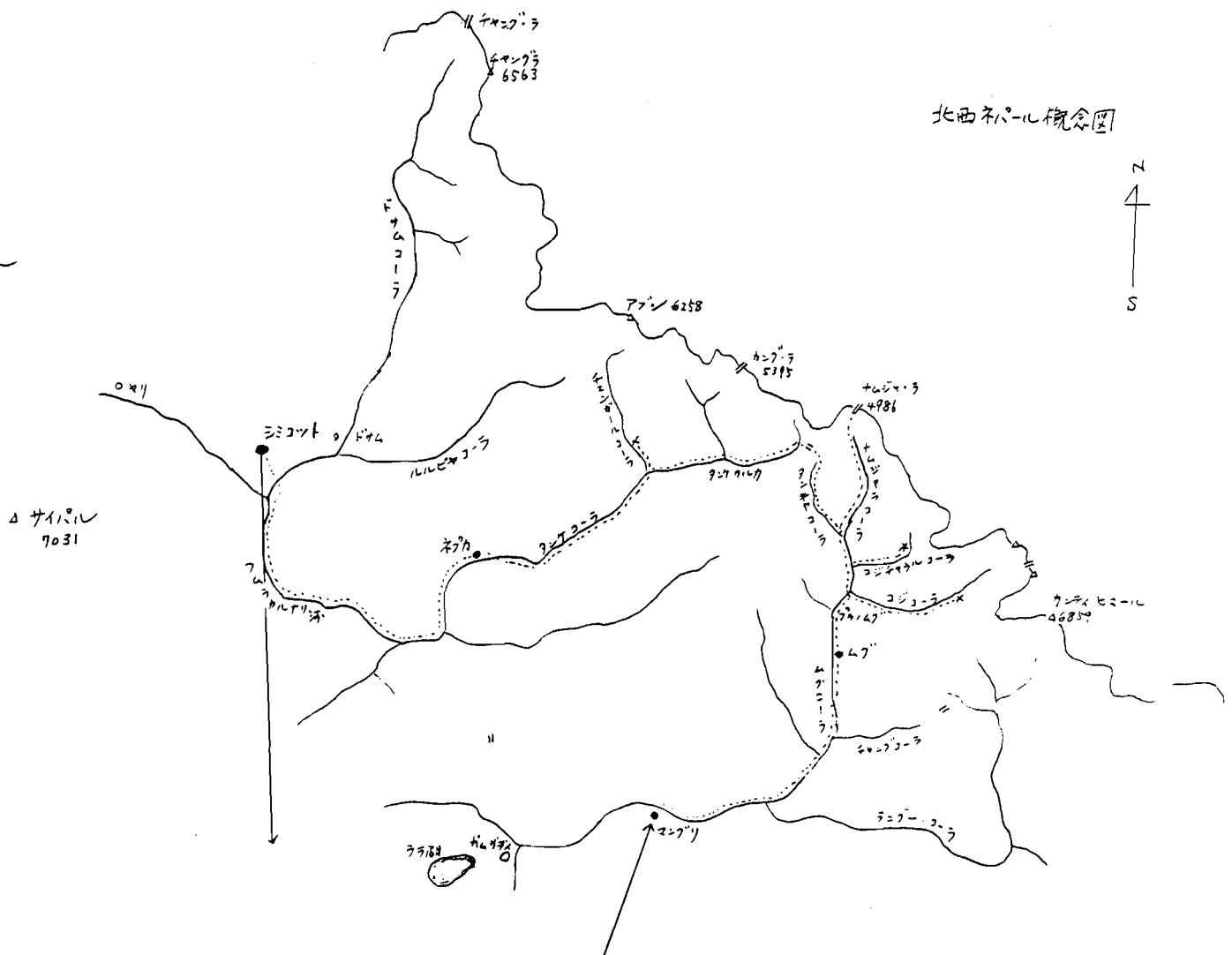
ネプカまでの長い下りは、一軒の人家もなく、夏に利用するカルカがあるだけで、一週間の間、人やヤクに出会うこともなく、まさに桃源郷を歩く思いだった。

今回の西北ネパールの山旅で一番楽しかったのは、この谷であった。女房はチベットとの国境稜線に沿って歩けたのが最高と言っている。

タンケコーラの途中で、ゴラクヒマールのアブシ峰(6258m)に入るチェンガールコーラを探索したりして、ネプカの部落に着いたのが10月14日であった。部落の中でテントを設営すると、登山隊を見るのが初めてなのか、ここでも大変な人だかり。夜遅くなくてもテントの周りから離れてくれない。また、テレビカメラを見るのも初めてなので興味津々。人家は45軒、人口300人とか。ネパール政府は識字教育に熱心で、こんな山奥にも学校を作っていた。3人の教師に生徒25名。そして水道施設にも力をいれていて、この部落にも簡易水道が敷設されていた。

ネプカで休養することもなく、後半の山、ドザムコーラの最奥にあるチャング・ラ峰(6563m)にむけて、タンケコーラからフムラ・カルナリ河沿いにキャラバンは続いた。途中でネプカのポーターが中心となってストライキが起こる。やはり西北ネパールには昔のままのネパールが残っている。

サイバル北面に登った東京の野沢井君らがフムラ・カルナリ河を遡行しているので、我々のトレースは今年の2隊目となる。毎日毎日よくも歩いたものだ。ドザムコーラの出合いまで6日を要す。ドザムコーラの出合



で登山隊と別れて、シミコットに到着したのが10月21日であった。もう歩かずとも良いと思うと急に疲れが出てくる。シミコットは陸の孤島であり、最近ではネパールからカイルスへのトレッキングの拠点ともなり、欧米のドレッカー数名と出会う。ソーラー発電で村には電灯が午後9時まで灯る。シミコットからスルケットまでは小型の飛行機で、スルケットからはバスを一台チャーターして、深夜をかけてカトマンズまで。カトマンズ到着10月25日。登山隊は、チャングラの主峰は時間の余裕が無く登れなかったが、登山ルート上の南西峰(6150m)には初登頂することが出来た。

帰国までしばらく時間があつたので、私達夫婦はエベレスト方面にトレッキングに出掛けた。今年は「VISIT NEPAL '98」と宣伝しているのかして、カトマンズも山中も外人で溢れていた。それもドイツ・フランス・イタリアあたりの中高年のグループ旅行者が目立った。今年の正月には行けなかったゴーキョピーク(5483m)の頂上より、チョーオユー、ギャチュンカン、エベレスト、マカルーの峰を無風快晴の中で見ることが出来た。カトマンズへの帰途、はじめて「エベレストビューホテル」に一泊する。ホテルのテラスからはエベレスト、ローツェ、アマダブラムを眺めながらお茶を楽しんだ。

今回は高度順応も順調にすすみ、頭痛や浮腫もなく、下痢や風邪ひきも起こらずに快適な山旅ができたのは自己管理が良かったことと、登山隊が日本から携行した日本食に起因する。しかし、それでも私達の体重はそれぞれ8kgほど減った。

帰国したのは11月15日となり、約100日あまりの旅であった。

登山隊の日常の行動や写真は、持参したパソコンで衛星電話を経由して、日本へ電子メールで送られ、ホームページに掲載されることにより、多くの人達に活動を知って貰うことが出来たようである。

10月初めから、私達と行動を共にしたNHKの取材班の記録は、去る1月29日と31日の両日、「NHKスペシャル」<シェルパ極限の世界に生きる>と題して全国に放送された。ご覧になられた方もおられるだろうが、プロの編集した映像の出来映えは素晴らしく、シェルパの歴史が山と無縁の人達にも理解されたことと思う。

さて、今年はどんな山旅が出来るだろうか。

山は逃げないが、人は一年一年年老いていく。

今回の山旅が出来たのは池永会長ならびに吉永定雄氏、大西保氏（大阪山の会）の方々のご支援のお陰です。大阪山の会のホームページに「西北ネパール登山隊」の活動が掲載されています。ご覧ください。
<http://www.sun-inet.or.jp/~showa-p/oac>



平成10年度冬山行事報告

S45卒 大島一恭 記

1. 計画 中央アルプス主稜線縦走

(聖職の碑～木曾駒・宝剣～空木)

12/26～1/1

2. メンバ 山本(69), 藤本(64), 小笹(62),
久保田(61), CL 苑樹(58), 大島
(52) 平均61歳

3. 行動実態

12/25 深夜、駒ヶ根山荘集合。久方の再会に話し
(酒?) が弾み、就寝1時。(それでも、何時もより
早い方…入山の前夜に山荘に集まると何時も盛り上がり過ぎる)

12/26 晴れ 強風

山荘(8:00)-桂小場1200m(9:20)-ふだの泉(9:50)-野
田場(11:25)-大樽小屋(13:20)

案の定、予定より2時間以上遅れて、スノータイヤ付
きのレガシ・BMW2台にて山荘を出発。1時間で桂小
場。途中何故かBMWが雪にスリップで坂を上がらず、
皆で車を押す。信州大の駐車場に(P)。…一般的に
は下のキャンプ場に(P)が常識。

冬枯れの山に大きな霜柱と落ち葉を踏みながら久し
ぶりの重荷(20数kg)。誰言うともなく「比良の薪上げ
位やな、但しあそこは登りちゃうけど…これで一日中
登りはかなわんな…」、30分1ピッチのスローペース
で歩く。野田場までは陽が当たり雪無し、分水嶺～将
棋頭(西駒)の雪嶺が遥か高みに望まれる。巻き道の
為、風は当たらないが、木々はゴウゴウと大きな音を
起てている。馬返し・権兵衛峠分岐までは馬が歩ける
程良い道、先行の単独行者は遥か先の様である。樹林
帯ではあるがこの辺りまでくると風当たりがかなり強
く寒い。大樽小屋(標高2000m)の手前より積雪、今日
中に西駒まで高度差750mは無理と、小屋泊り。10名
程の収容能力、隙間だらけで外気温度と変わらず、

10度位。ガスの消耗が予定より大幅に早く、又皆の
食欲旺盛にてα米の計画が狂い翌朝の雑炊の分が残ら
ず夕食1回分を朝食に持って来る羽目に為ってしまった。

12/27 高曇りのち晴れ

小屋(7:30)-胸突きの頭(10:30)-(11:30)西駒山荘

いよいよ胸突き八丁を重荷を担いで登る。昨日の単
独行のラッセルがあり、助かる。踝から膝まで、つぼ
足。下山者1名に会う。途中からは北ア、穂高槍、後

立、八ヶ岳、目の前には御岳、乗鞍、南アの峰が手に
取る様に見え、正に360度の展望。分水嶺からは西駒
山荘まで尾根筋を忠実に辿る。夏道(巻き道)は昔、
高校生が雪崩に遭った所。さすが稜線は風が強い、慌
ててカッパを着る。馬の背から木曾駒の稜線をじっく
り見るが、テントの張れそうな所は無い。西駒山荘(標
高2750m)は大きな小屋。先行してた単独行がテント
を畳んでたので話し掛けると「朝6時に出発、宝剣を往
復して戻ってきたばかり、空身で5時間半」との事。
但し20代半ばの現役バリバリの感。今日中に駒を越え
れそうにない、ガスと食料計画が完全に狂って今の調
子でα米は5日分の予定が2日分しか無い、食い延ばし
はしたくない、等などと誰言うともなく、今夜の泊り
は西駒山荘、明日は宝剣往復、空木までは無理と決定。
このあたりは、装備食料担当の大島の責任ではありますが、
伴氏のご指摘の方が的を得ていると思います。
入口は雪で埋まっており窓より入る。昨夜は冷えたの
で、小屋の中でテントを張る。単独行がまた1人登って
きて我々の横にテントを張る。明日は松尾まで行くと
の事。

夜、満天の星空、伊那の灯がキラキラと見えた。

12/28 快晴無風

小屋(7:00)-(10:10)木曾駒(10:45)-(11:15)宝剣山
荘(11:30)-(11:50)宝剣岳(12:00)-(12:30)宝剣山荘
(16:00)西駒山荘

やはりテントの中は暖かく良く眠れた。キャンピン
グガスは熱効率が悪いのか、先日来調理に時間が掛り
過ぎる。冬山ではガソリンか灯油でないと無理? 4時
起床だが出発がかなり遅れ、単独行に先を越される。
それでも、昨日までの重荷と違い皆元気良く雪の稜線
を歩く。途中、「聖職の碑」に合掌、誰が手向けたのか
数本の花が色も失わず置かれている。馬の背の稜線は
下から見上げた程には痺せておらず、強風の為か木曾
側に夏道が半分程でっており、雪底は無かった。このあ
たりから、主峰の木曾駒が良く見え、昨日よりもさら
に天気は良く、360度の展望を楽しみながら登る。

頂上より携帯電話の発信を試みるが電池残量ゼロに
て不可(下山後使用可、電池満杯)?。宝剣山荘まで
気軽な稜線散歩。ここでザイルのみ担ぎ、宝剣に向か
う。昔取った杵柄の連中も慎重に登る。ガリーには雪
がべったり付き、バケツが掘られており快 適な登攀で
はあるが、下はスッパリと切れている。頂上直下裏の
クサリ場は雪は殆どなく頂きへ。極楽平までの稜線は
雪がべったりで夏道のピン・クサリは殆ど雪の中の様、
空木・南駒が大きく山容を誇示しているが、稜線遥か
遠く…。下りはガリー2ピッチにザイルをフィックス、
安心して下れるが、登りより下りの方が時間が掛る。
宝剣山荘は営業しており、ビールと行きたい所だが、
馬の背の下りを考え、ジュースで乾杯とする。

12/29 晴れ

山荘(9:20)ー(10:00)分水嶺ー(10:40)6合目ー
(11:20)大樽小屋ー(12:00)馬返しー野田場(12:35)ー
ぶどうの泉(13:00)ー(13:40)桂小場

大量に余った4日分のクラッカーを山荘に寄付。山々に別れを惜しみながら下山。

胸突きの下りは雪が適度のクッションとなり膝を痛める事も無く、快調。岳樺の間より見上げる空の青さが目に染みる。将棋頭より雪煙が上がっており、稜線は風が強そう。ベストタイミングの下山であった。桂小場より少し下の「梅庵そば」のざるそば2杯を食べて、駒ヶ根山荘に帰る。が、楽しみにしていた「こまくさの湯」は年末休業、ならばと「松川温泉」へと高速をとばすがここも同じ。第三セクターはやはり役所である。駒ヶ根の銭湯「富士の湯」にて垢を落とし、信州牛のすき焼き大宴会にて山行の幕を引く。

追記 …翌30日、昨日までの好天と打って変わって雨、山2000m以上はガス、多分吹雪であろう。いい時に下山したものである。昨年の空木といい、天候には恵まれている様である。

反省 …食料 市販のα米200g(2食分)を3個=6人、夕食にて2/3、残り1/3を翌朝の雑炊と計画、6日分18個を用意したが。結果、夕食1回にて3個全て朝の雑炊も1回に3個全てを食し、計3日分となった。理由は、大島がα米200g=米2合(320g)と思い込んでいた為。尚、酒は空木の反省+藤本氏の差し入れにて充分であった。

燃料 キャンピングガス寒冷地用大(470)を4個、小(270)を1個用意。始め10分位は勢い良いが、すぐ火力が落ち、チョロチョロ。振ってみるとガスあり。ポンベが凍り付く始末。水を作るのに、時間と量を消耗。又全てテントの外で作業を行ったので、外気温の低さもかなり影響したかも？全てのポンベにガスが1/4位残っております。

六甲山縦走

メンバー 佐々木、藤村、上田
日 時 1998年12月6日(晴)

六甲全山縦走は須磨浦公園から宝塚まで56km、登り下り3000m以上というハードでクラシックなコースであるが、今回我々は約20%カットして菊水山からトライした。

神戸電鉄菊水山駅スタート(6:55)→菊水山(7:30)→鍋蓋山(8:24)

市原を経て摩耶山へ。ここは大駐車場、バス停留所もある。昼食を取るが、山の雰囲気はない。

ここから自動車道を歩き、六甲最高峰へ。到着13:55。ここで小休止をして塩尾寺へ下る。到着16:30。9時間半の歩きであった。塩尾寺から阪急宝塚駅まで歩く。このコースは距離は長い、あまりにも開発されており、車道を歩くなどおもしろさに欠ける。

(上田記)

ダイヤモンドトレール

メンバー 佐々木、上田
日 時 1998年12月20日(晴)

通称ダイヤモンドトレールは歴史上名高い。二上山から葛城山、金剛山を経て、紀見峠に至る全長約40kmのコースである。今回我々は初冬の二上山から金剛山まで歩いた。先日の台風の影響で倒木が多かったが、道はよく整備されており、楽しい歩きであった。階段の多いのには閉口した。

近鉄電車二上山神社口駅より出発(7:35 標高50m)→二条山麓岳(8:35 標高500m)→竹内峠(9:05 標高340m)→平石峠(9:45 標高480m)→岩橋山(10:40 標高660m)→葛城山(12:10 標高960m)→水越峠(13:20 標高530m)→金剛山(15:10 標高1120m)→千早へ下山(16:20)

全歩行距離約33km、8時間45分。佐々木が高度計で計測したところによると、登りは合計1700mあった。
(上田記)

伯耆大山積雪山行

兵頭 渉

1. 期間

1999年1月15日-1月17日

2. メンバー

苑樹(58)、佐々木(55)、藤村(54)、大島(52)、
兵頭(51)

3. 計画

1日目 自家用車にて京都午前4時出発、途中で参加者をピックアップし、中国道・米子道を経由して大山寺へ11時到着予定

大山寺(40分) 元谷 テント設営藤村氏の到着待つ
2日目 元谷(40分) 五合目(15分) 六合目避難小屋(60分) 弥山(25分) 剣ヶ峰(25分) 弥山(40分) 六合目避難小屋(60分) 元谷 テント撤収
米子 在 沢田氏訪問予定

3日目 午前中綿阪の途につく、夕刻大阪、京都帰着

4. 記録

1月14日20時阪急長岡天神駅西口にて佐々木先輩をピックアップし兵頭の寮室にてシュラフ泊、1月15日3時40分起床、同時に苑樹先輩からの電話にて付近のコンビニ到着確認。寮までの道順電話ガイド。4時に兵頭車に苑樹、佐々木、3名乗車し大島宅へ。5時大島氏をピックアップ。

中国道への進入でミスリ1時間ロスするも中国道、米子道ノーチェーン、地道でチェーン装着し大山寺9時着。連休と積雪のせいか、大山寺付近の駐車場は満車状態で車で5分程下った駐車場で装備点検、登山出発となった。

10時大山寺参詣を済ませ、なお天気が回復しない中スタート。1時間でテント予定の元谷につくが吹雪が荒れ狂い、視界なき為、テント張るも吹きとばされ元谷入口に変更してやっと落ち着く。昼食準備中に、藤村氏から大山寺着の連絡入りテントサイトを連絡。昼食は電器がまだ炊いたご飯をZIPバックに入れて運び込んだものにレトルトのカレーをかけたもの。藤村氏を迎えて明日の道付け、ラッセルの準備を話しつつ、お土産を肴にビールなどを飲むうちに、夕食の準備と平行して酒盛り状態となり早朝出発を期して19時就寝。本日の夕食はオデン、うどんでした。

1月16日 視界悪いが、風弱い中、7時30分出発。トレースは少しあり2、3パーティと相前後して、積雪期ルートを行く。森林帯にはガスがかかり、幻想的なムー

ド！夏道との合流地点までは急登、合流後すぐに6合避難小屋(9時着)。避難小屋は非常に狭く、先行者で一杯のため小屋前の台地で小休止。

ここからわずか登ると大山西面の広い斜面をジグザグに登行することとなる。かすかなトレースたどり8合目手前稜線直下あたりより、大山特有の地吹雪が舞いルートが雪にかき消される。

兵頭先頭で夏ルートの痕跡を捜し弥山小屋経由、弥山山頂に10時20分立つ。地吹雪強く、気温はマイナス15度強で、オーバー手袋していても冷たい事この上なく、しびれてくる。全員が、手袋を1度はずして休んだ為、冷たくなった手は元になかなかもどらない。

剣ヶ峰へのナイフリッジ300mの縦走を狙いザイル2本、ハーネスでの完全装備であったが、吹雪の為、完全なホワイトアウトで、即刻、断念。次回の楽しみに残り、テントに同ルートでもどり12時頃旅が終わった。

そのまま、テント撤収して、皆生温泉で日本海の塩の香りする温泉を味わってから大山の麓で曹洞宗住職の道を歩む澤田君の寺に行き、深夜まで話がはずんだ。

17日の大山はかすかに輪郭をあらわし、その姿を我々に見せてくれた。

追記：兵頭が元谷のテントサイトから駐車場まで山スキーで下ったが、途中大山寺のバス停で1度スキーを外し道路沿いの除雪されていない所を快適に滑れた。大山を山スキーのフィールドとして考えた場合、元谷から上部の登山ルートは適さないように思います。大山は、中国道、米子道の開通により日帰り可能な山となりました。好天の見込める未明に大阪を出発し積雪期の剣ヶ峰へ立ちたいと思います。

□ □ □ □ □ □

会員消息

会員神吉仁作氏(昭5高商)が昨年12月にご逝去されました。享年88才。ご冥福をお祈りします。

編集日誌

紙面の関係でちょっと途中で失礼します。

2月発行ということコロッと忘れており、アセアセと作ったので、なんだか簡単な作りになってしまいました。(いつもこんなもん?) 次号からは高尾裕君(平7卒)に協力してもらう予定で、ゆっくりと世代交代をはかるつもりです。乞うご期待。

【む】

風雪と凍傷、だから快樂（中央アルプス単独行） 和田城志

この数年、剱岳の頂上を踏んでいない。体力は著しく低下し、仲間の足を引っ張るだけになってしまった。膝の状態も悪化の一途である。しかし、冬山シーズンになると何やら落ち着かない。一度でも行かなかったら、そのまま終わりになりそうな気になる。終わったら、もう本当に終わりである。もしも他のことに興味を持てたとしても消化不良で欲求不満に陥ることは間違いない。ましてや、厳しいクライミングに耐えられないからといって、のほほんと雪見酒と温泉でくつろぐなんてことは、残り少ない貴重なチャンスを考えるととてもできない。やっぱり山に行かねば一年は終わらない、一年は始まらない。

この頃、単独行が多くなった。独りが好きな訳ではないが、独りきりの快樂が理解できるようになった。それにキャバが小さく独断的な手前勝手はたまには独りでいるのがいいのだそうだ。他人を不快にしないし、自分にも腹が立たない。

去年の冬は小黒部谷より毛勝山に登り、北方稜線よりハッ峰を目指したが、ブナクラ乗越の下りで膝を痛めてしまい断念してしまった。若い連中の体力技術に圧倒されて、情けない思いをした。熟練が往々にして腐敗や退廃を招くのは、慣れと自足のせいだ。どんなささやかなことでもいい、初めての香りを失いたくはない、欲望を保ちたい。今年は単独で黒部を横断するつもりでいた。針ノ木岳から黒部に下り、木挽山から薬師岳へぬけるルートだ。しかし、仕事が立て込み二週間の休みが取れず、仕方なく一度も訪れたことのない中央アルプスに変更、全天候型で端から端まで歩いてやろうと考えた。

1998年12月29日、ちくまにて離阪。仕事納めで一杯飲んで家に帰り夕食をかき込んで、「ほんじゃ、よいお正月を。」と、妻に言い捨てて、あわただしく飛び出した。（妻と初孫を運れた長男、のんきな受験生の次男、少し数が増えたが、いつものごとく父親不在の穏やかな正月だったらしい。）

30日 小雪 木曾福島（2：35）－福島Aルート二合目入山（3：00）－赤林山のコル（7：30）－七合目分岐点（10：00）－駒石直下（11：45）

乗り越しが心配で、よく眠れなかった。木曾福島で降りた登山者は私だけだった。タクシーで二合目へ、真っ暗な冬枯れの林に小雪が舞う。運転手さんは曰く、

「物好きなの。こんな夜に一人で山に入って怖くないのか。」「はあ、少し怖いけれど、直ぐに慣れます。」

三合目までは粉を撒いたような雪、夏道は明瞭で雪は堅く歩き易い。四合目あたりから冬らしくなって、未明の空から小雪が湧きだしてくる。西風が強い。人影もトレースも皆無、このルートは冬はほとんど使われてないと思われる。獣のラッセルが大いに助けになる。赤林山を巻いてコルへ、五合目を越えるともぐり始め、ワカンを装着する。たいした雪ではないが、根雪がないのでよく潜る。独りでラッセルしていると無闇に悲しくなって、駒ヶ岳まで行くぞと張り切っていたが、早々に挫折した。麦草岳の稜線に良いテント地があるかどうか不安だったし、風とガスを考えて、駒石の手前でテントを設営した。正午だが、もう九時間も歩いている。

31日 曇り時々晴れ 出発（8：00）－麦草岳（9：00）－牙岩手前のコル（10：30）－木曾前岳（13：30）－玉ノ窪小屋（14：00）

昨日の疲れはひどく、五時に寝たのに朝四時までぐっすり泥のように目覚めなかった。気圧の谷が来るというし、雪もちらちら降ってるし、出発をためらっているうちに八時になってしまう。麦草岳への登りから雪がしまってきて、以後下山までアイゼンによる歩行となった。

麦草岳から悪場が連続する。急な雪壁をクライムダウンし、でこぼこの多いナイフリッジに入る。左側は深いラッセル、右側はガレた絶壁。緊張と労力でうんざりする。牙岩のコルで一服、不安定な雪と小さなギャップがこれでもかこれでもかと出てくる。最後は主稜線へ急登、今山行で一番難しかった。一般の人はザイルが要るだろう。上松Aコースに合流すればトレースがあり、すんなりと小屋に着く。小屋は閉鎖されており、ブロックで囲んだ幕営跡にテントを張った。今日も誰にも会わなかった。

元日 快晴風強し 出発(7:00)―宝剣小屋(8:00)―三ノ沢分岐点(8:50)―松尾岳(11:00)―熊沢岳(12:30)―木曾殿乗越(14:20)

冬型で乗鞍や北アルプスは雪雲におおわれているが、ここは快晴だ。しかし、さすがに風は強く気温も低い。立派なトレースを木曾駒ヶ岳を経由して宝剣岳に向かう。小一時間で着いた。千畳敷からの利便さで人が多く、十張り程のテントがあった。軽装の二人が宝剣の登りにかかったので、僕も後をつけて行くが、強い西風で二人は引き返してしまった。さほど危険は感じなかったので続行、あっさり頂上へ。休む気にもならず、そのまま南側へ下って行った。鎖場が連続する岩稜だが、格別難しくも危なくもなく分岐点に着いた。ここからはなだらかな山稜で問題はまったくない。風で雪は吹き飛ばされていて、夏道にアイゼンを利かして歩く。松尾岳の登りで六人パーティーとすれ違う。単調な尾根歩きだったが、少し長く歩いたせい、疲れた。木曾殿乗越の狭い避難小屋には中年の二人組がいたので、外にテントを張った。

2日 風雪、風強し 出発(7:00)―空木岳(8:20)―南駒ヶ岳手前のコル(10:30)―雪洞テント

小雪まじりのガスと強い西風の中、出発する。しばらく登ると、上から二パーティーが下ってきたのでルートファインディングの心配がなくなった。頂上直下の岩尾根は右をからむように登る。間もなく頂上へ、視界は悪く、風の勢いも増している。空木岳からはトレースがあいまいになってきた。なるべく夏道を忠実に歩き、西風にあおられてスリップしないように注意した。天気回復の見込みがないので、コルで風をさけるべく東側斜面に回り込み、二時間半をかけて立派な雪洞テントを設営する。右の頬と鼻先に軽い凍傷を負った。雪洞内テントは暖かく、外の気配も分からない静寂のシェルターだ。コンロ全開、焼きそば食って、樋口一葉を読んで、雪洞の青天井の薄明かりを愛でて、蠟燭と話をする。風雪から平安へ、山登りの快楽の極まるときだ。

3日 晴れ時々曇り 出発(6:40)―引き返す(7:20)―再出発(8:50)―南駒ヶ岳(9:20)―コル(10:50)―仙逝嶺越え(11:50)―越百山(13:00)―P小屋(13:30~14:10)―伊奈川ダム(17:00~50)―須原(18:30)

冬型は変わらず、昨日の悪天は日本海を通過した低気圧のせいだろう。日の出と共に視界が広がり始め、流れる雲の上に満月が見え隠れする。意を決して出発するが、強い風とガスが湧いてきて不安になり、雪洞に引き返した。天気は回復傾向なので心配はない。再

出発後はあっさりと南駒ヶ岳に着く。完全に晴れた。

右に左に夏道らしきところを忠実に下りコルへ、鋭い岩峰に見えた仙逝嶺も右斜面をからむように登り、丸いならかな尾根に続いて行く。越百山以南は山が急に低くなり、雑木に蔽われた山稜がのびている。計画では摺古木山まで歩くつもりだったが、藪こぎを強いられそうだし、日数も不足しそうなので下山することにした。ここからはトレースがしっかりあり、夏と同じコースタイムでダムまで下った。ダムの専用電話でタクシーを呼んでもらい、須原駅へ。閑散とした無人の駅舎に、正月のしめ飾りが揺れていた。

夏冬を通して初めて訪れた中央アルプス、やはり山が小さい。正月は人が多いだろうと心配していたが、人に出会ったのは、宝剣岳は別として、四パーティーだけだったから、ほとんど独りで山の中にいたことになる。五日間全日行動で充実した山行だった。黒部釧と比べるべくもないとはいえ、しっかり顔面凍傷になったのだから、あんまり見下しては失礼になる。

考えてみればこの狭い日本の山で、冬の頂上で触れた所は数えるほどしかない。体力気力の萎えた今、登り残した冬の山を行脚するのも悪くはない。日く全山縦走単独行、南アルプス、魚沼三山、飯豊連峰、日高山脈、知床半島などなど、二回生春山の気分つてのはいいなあ。ああ回春の妄想、禿げて白秋悲しき現実、さればこそ憶えて、アルピニズムはどっこい生き延びていくのだ。

風雪の嶺より恋いしきことありや
妻と寝床にほほづえついて

世紀末 早春

- | | | |
|------------|--|-------------------|
| ①3月27日(土) | 金剛～二上山ハイキング
(なみはや国体縦走＝ダイヤモンドトレールコース) | (責任者: 上堂・佐々木) |
| ②4月28日(水) | ヒュッテ雪線 合宿 | (責任者: 久保田・佐々木・大島) |
| ～5月5日(水) | 周辺溪流釣り・山荘整備・散策
空木～宝剣・仙丈～甲斐駒/北岳・上高地～蝶…佐々木・上田
新緑の伊那谷の旅を満喫下さい | …久保田・大島 |
| ③5月23日(日) | 第108回 大阪市立大学ボート祭 参加 | |
| 又は30日(日) | 悲願の3回戦進出を! | (責任者: 上田・八木) |
| ④6月前半 | 新緑の中央アルプス散策・沢登り(山荘利用) | |
| | 是非とも推薦したい時期です | (責任者: 久保田・田中) |
| ⑤6月前半 | 富士山 | (責任者: 佐々木) |
| 7月前半 | アルプス目指し高度順化トレーニングを | |
| ⑥8月5日(木) | ヨーロッパアルプス 合宿 | (責任者: 佐々木・小笹) |
| ～15日(日) | シャモニ・ツエルマット・グリンデルワルドをベースキャンプに!
散策も可能! | |
| ⑦9月中旬 | 北アルプス・南アルプスの旅(山荘利用) | (責任者: 福山) |
| | (参考: 上高地まで車で2H、戸台まで1H) | |
| ⑧10月8日(金) | 馬場島から剣岳 | (責任者: 廣瀬・沢田) |
| ～11日(月) | 永田君を偲んで | |
| ⑨11月後半 | 第6回バードウォッチング | (責任者: 上堂・島川) |
| ⑩12月29日(水) | スキー及び冬山登山(山荘利用) | (責任者: 苑樹・大島) |
| ～1月3日(月) | 冬の上高地・西穂西稜 | |

各行事の具体的な内容は各行事責任者にお問い合わせ下さい。

※皆様の積極的なご参加をお願いします。ご意見・ご要望は事務局または幹事までお願いします。

※参加希望者は予定日の一ヶ月前に各責任者にご連絡下さい。



総会のご案内

山岳会総会を下記の通り開催いたしますので、万障お繰り合わせの上、是非ご参加下さい。

今回はこの紙面をもって案内とさせていただきますので、ご注意ください。

出欠のご返事は、3月10日までにお願いいたします。

〔と き〕平成11年3月20日（土）午後2時から

〔ところ〕 大阪弥生会館
大阪市北区芝田2-4-53
TEL06-6373-1841

〔講演〕「ニンチンカンサ登山報告」
講師武部秀夫
(市太山岳会、HAJ登山隊員)

〔懇親会〕午後5時30分から

〔懇親会会費〕 7,000円

なお当日、年会費5,000円も徴収させていただきます。

